

特集／ヒルベルト

ヒルベルトの時代

砂田 利一

巻頭の言葉として筆者に求められているのは、本特集の主人公であるヒルベルトの業績全体を俯瞰することであるが、ここでは通常とは少々異なる視座に立った話から始めよう。

伝記文学の手練れである S. ツヴァイクが 1934 年に著した『エラスムスの勝利と悲劇』の冒頭は次のような文章で始まる。「ロッテルダムのエラスムスと言え、かつてはその世紀の最も偉大で輝かしい名声の持主であったのに、今日ではもはやほとんど 1 つの名前以上のものではない。…彼の無数の著作は、ほうぼうの図書館のなかで妨げられることのない眠りをむさぼっている。」¹⁾

人文主義に基づいたエラスムス (1466 年-1536 年) のコスモポリタニズム (世界市民主義・世界主義) は、現代の欧州連合 (EU) の理念に受け継がれているとはいえ、宗教改革が引き起こした諍いに巻き込まれ翻弄された彼の生涯や、彼の著作の根底にある考え方を知ろうとする人は今でも少ない。我が国でも、倫理の教科書で簡単に触れられる程度である。ツヴァイクがエラスムスの伝記を書いた 1930 年代は、ナチスの脅威が拡大しつつある頃である。そのような社会情勢の中で、エラスムスのヒューマニズムを今一度思い起こす必要性を痛感したことが、彼の伝記執筆の大きな動機であった*1)。

さて、「今日ではもはやほとんど 1 つの名前以上のものではない」というのは、長い歴史の中に登場した偉大な数学者についても言えることである。例えば、エラスムスが没してから 60 年後、宗教間の対立が国の間の対立に変化した頃に誕生したデカルト (1596 年-1650 年) を思い起こそう。1637 年に出版された彼の著作『方法序説』は、近世哲学の金字塔として読まれることは多いものの、その付録 (むしろ本文) の 1 つであり、後に座標 (解析) 幾何学として結実した彼の「代数的方法」が述べられている『幾何学』を直接引用することは稀である。言い換えれば、デカルトの方法は、その後の数学の血となり肉になったのであり、彼の名前はしっかりと数学史に根付いているものの、今さらデカルトの業績を数学の論文に引用する必要はないからである。

より現代に近い時代のヒルベルト (1862 年-1943 年) についてはどうだろうか。エラスムスやデカルトに較べれば、彼の業績が図書室の中で眠りをむさぼっているとまでは言えない。しかし、1900 年の国際数学会議において彼が提出した「23 の問題」は、その後多くの数学者の努力により大方解決し、「不変式論」、「代数的整数論」、「積分方程式論」、「幾何学基礎論」、「不定方程式論」などの

ダヤ主義的雰囲気や自国で強まる中で本人にも危害が及ぶことを恐れ、1934 年にイギリスへ亡命した。

*1) オーストリアのユダヤ系作家であったツヴァイクは、反ユ